

中世において否定の陳述副詞として用いられた「つやつや(と)」の語史

— 副詞の機能変化に関する一考察 —

田和 真紀子

〈キーワード〉

「つやつや(と)」、中世、否定の陳述副詞、情態副詞、擬態語、全否定、完全性

はじめに

語には、使用されているうちに意味や機能の変化するものがある。一口に語の変化とはいっても、語を単位とした個別的な変化、品詞を単位とした変化、文法の変化など様々な面で変化は起こりうる。

とりわけ副詞の語彙の中には、通時的に変化の様相を追うと、意味のみならず文法の面でも変化しているものがあることに気付く。その変化の一つが、いわゆる副詞の陳述副詞化である。

副詞の陳述副詞化については、寿岳(1983)の「擬声語の変化」において、擬声語・擬態語類は使用されているうちに何らかの変質を経るなどして(例えばアクセント位置の変化など)陳述副詞化する場合のあることが指摘されている。しかし、同じく寿岳(1983)では「ある種の擬声語は、状態性のものから、程度性を示したり陳述支配をしたりするようになるが、その進展に反比例してその本来の性格を急速に喪失してゆく」²というように、擬声語・擬態語から程度副詞化・陳述副詞化することは一方向的な変化として捉えられている。

そこで今回は「つやつや(と)」³という、中古に擬態語、中世に否定の陳述副詞、そして近世から現代にかけて再び擬態語として用いられた語の語史をたどりながら、副詞の機能変化の過程を観察する。同時に、寿岳(1983)で擬態語から陳述副詞への一方向的な変化として把握されていることに対して、「つやつや(と)」の変化が否定の陳述副詞化の後、再び擬態語として用いられてきたという語史を明らかにすることで、副詞の機能変化が一方向的なものではないことを指摘したい。

副詞の定義や機能などについては諸説あるが、ここでは山田の「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」の分類に従う。また、「擬態語」「擬声語」「オノマトペ」ということばについても、小松(2001)⁴で「活写語」という語の提案がなされており、共感するところも多いのだが、論旨をわかりやすくするために今回は「擬態語」の語を用いる。

1. 「つやつや(と)」の語史

「つやつや(と)」は現代語でも用いられている情態副詞である。例えば、(1)髪の毛をはじめとする人間の部位(肌・爪・唇など)の表面が滑らで輝きを帯びている様子や、(2)料理のおいしそうな形状(米の理想的な炊き上がりの様子やとろみの質感)、(3)金属・プラスチック・照葉樹の葉など、硬質のものの表面が滑らかで輝きを帯びている状態など、「摩擦が少なく光沢を帯びた表面の状態」を形容する用法がある。(下記用例(1)～(3)は田和の作例である。)

(1) 彼女の髪は、つやつやと美しかった。

(2) 照り焼きの表面がつやつやとしてきたら火を止める。

(3) ヤツデの葉がツヤツヤと輝きを増す。

現在「つやつや(と)」は、これら情態副詞としての用法のみといってよい。しかし、「つやつや(と)」の語史をたどると興味深い用法が存在する。それが、今回取り上げる「つやつや(と)」の否定の陳述副詞としての用法である。

「つやつや(と)」が否定の陳述副詞として使用されたのは、院政・鎌倉時代以降から江戸時代に限られる。それ以前、平安時代の和文にも「つやつや(と)」という語は存在していたが、ほぼ現代語の情態副詞と同じく、髪や絹の摩擦のない滑らかで美しい様子に用いられており、否定の陳述副詞としての用法は私見の限り見出されなかった。

そこでこの論考では「つやつや(と)」の用例を、平安時代の和文、中世の仮名文書と漢字仮名混じり書かれた文学作品、室町・江戸時代の辞書・草子類にわけて検討することによって、「つやつや(と)」という一語の用法が情態副詞から陳述副詞、そしてまた情態副詞へと、具体的にどのような変遷過程をたどったのかを時代ごとに詳しく通観する。

1. 1. 擬態語としての「つやつや(と)」(平安時代)

平安和文における「つやつや(と)」の特徴は、全て情態副詞・擬態語として用いられていることである。また1.でも少し触れたように、「つやつや(と)」が否定表現と呼応する副詞として用いられている例は、今回の調査範囲において、和文はもとより11世紀前後の訓点資料など⁵でも見出すことはできなかった。

平安和文において「つやつやと」を使用している作品⁶と使用状況別に分けた用例数の一覧を掲げると次のようになる。

<平安和文における「つやつやと」の各作品使用状況別用例数>

	蜻蛉日記	宇津保物語	落窪物語	枕草子	源氏物語	紫式部日記	夜の寝覚	狭衣物語	栄花物語
髪の状態	—	3	—	—	7	—	4(1)	2	—
絹・衣の状態	1	—	—	—	1	1	1	—	2
その他	—	—	1	1	—	—	—	—	—
用例数合計	1	3	1	1	8	1	5(1)	2	2

用例数自体はそれほど多くないが、以上のように広く用いられていたことがわかる。

『夜の寝覚』の(1)は「つやつや」で用いられていた例であり、使用された形はほとんどが「つやつやと」の「と」の付く形である。また、用いられる状況は類型化されており、髪や絹（衣）の形容に用例が集中している。

使用状況ごとの具体的な用例を、上記表の分類ごとに挙げると次のようなものがある。

<髪の状態>

- (4) こほれかゝりたるかみ つやつやとめでたうみゆ。(源氏物語 若紫 - p157)
 (5) 御ぐしは、いたゞきよりすゑまで、いさゝかをくれたるすぢなく、つやつやとひまなくこりあひて、(夜の寝覚 - 大系 p75)

<絹・衣の状態>

- (6) 匂ふ許の桜襲の、綾、文はこほれぬばかりして、堅文の表袴、つやつやとしてはるかにおひちらしてかへるをきゝつゝ (かげろふ日記 下 - 大系 p287)
 (7) 珍しくなまめきて、透きたる唐衣ども、つやつやと押しわたして見えたり。(栄花物語 上 - 大系 p267)

<その他>

- (8) つやつやとまろにうつくしげに削りたる木の二尺ばかりあるを(枕草子 蟻通の明神 - 大系 p265) 【木材】
 (9) 髻はちりばかりにて、額ははげ入りて、つやつやと見ゆれば、物見る人にゆすりて笑はる。(落窪物語 二 - 大系 p164) 【額】

<髪の状態><絹・衣の状態>のように特定のものの状態を表現する一方、<その他>でも【木材】や【額】などが「摩擦が少なく光沢を帯びた表面の状態」を表す場合に用いられている点で、平安和文の「つやつや(と)」は現在の「つやつや(と)」の用

法に近く、情態副詞として用いられていたことがわかる。

1. 2. 否定の陳述副詞としての「つやつや(と)」(院政・鎌倉時代から江戸時代)

この項では「つやつや(と)」の否定の陳述副詞用法について観察する。院政・鎌倉時代を中心に江戸時代に至るまで、「つやつや(と)」は「ない」「ず」などの否定表現と呼応する陳述副詞として用いられている。特に院政・鎌倉時代においては、平安時代に髪や衣を形容する際に用いられていた「摩擦が少なく光沢を帯びた表面の状態」を表す情態副詞としての用法は見出せず、ほぼ否定の陳述副詞の用法が固定化している。

ちなみに私見の限りで否定の陳述副詞としてのもっとも古い例は、歴史物語の『水鏡』(1195年前後：12世紀末)、

(10) そのはしめの一劫の程・はつやつやとよの中・なくてそのことくにてありしに (水鏡 上・序 - p11)

(11) その御使・・庭・にひれふして七日までつやつやと物を・くはさりしを (水鏡 上・第廿代允恭天皇 - p57)

仮名文書では『鎌倉遺文』の「文覚上人意見状」(正治二年 1200年)、

(12) これをは、わか御身のとかとハ、つやつやおほしめさて、悪党のとかとのみおほしめして、(『鎌倉遺文』一〇九九「文覚上人意見状」正治二年(1200年))

物語・説話などの文学作品では『宇治拾遺物語』(1220年前後)、

(13) 翁顔をさぐるに年比ありし瘤、あとなく、かいのごひたるやうに、つやつやなかりければ、(宇治拾遺物語 鬼に瘤とらるゝ事 - 大系 p58)

であった。また、ほぼ『宇治拾遺物語』と同時期成立の史論『愚管抄』で使用されている「つやつや(と)」が全 16 例あり、早い時期の用例の上、使用数も多く、時期・量ともに目立っていた。

参考として、中世の文学作品の「つやつや(と)」の用例数(全て否定表現と呼応)を以下に示す。

<中世における「つやつや(と)」の各作品用例数>

	水鏡	宇治拾遺	愚管抄	十訓抄	沙石集	平家物語	とはすがたり	徒然草	太平記	御伽草子	天草平家
用例数	2	1	18	3	4	9	1	2	2	2	1

ちなみに『平治物語』『発心集』では「つやつや(と)」の用例はなかった。また、『古今著聞集』は索引で確認することはできなかったが、今回確認した限りでは6例用いられている。

実際の用例として、『水鏡』・「文覚上人意見状」・『宇治拾遺物語』以外にも否定表現と呼応し全否定を表す副詞として用いられている例をおよそ年代順に中世の仮名文書と文学作品から挙げると、次のようなものがある。

- (14) 御さうせちのつやつや候はぬ、いかゞし候へきと申候也、(『鎌倉遺文』 一二六〇「某書状」建仁元年(1201年))
- (15) スコシチカクヨリテ見ケルニ、ツヤツヤト死相ミヘズ。(愚管抄 五 - 大系 p267)
- (16) ツヤツヤ物モシラヌ人ノワカワカヲロカヲロカトシタルニ、(愚管抄 七 - 大系 p336)
- (17) てむまはつやつや候はて、まことすてぬへく候、こゝろなき申事にて候へんと、ちん馬候はゞ、二三日かし給はるへくや候らん、(『鎌倉遺文』 五三四一「某書状」暦仁元年(1238年))
- (18) 此馬、大和国の家のかたへゆきけり。つやつやとしらずして、はるかに帰りにけり。(古今著聞集 512 - 大系 p407)
- (19) 北方大納言佐殿は、たゞなくより外の事なくて、つやつや御かへり事もしたまはず。(平家物語 下 - 大系 p251)
- (20) コノヒトヒトノオホセノヤウハ、コレニハツヤツヤトシラヌコトニテサフラヘハ、トカクマウスヘキニアラスサフラフ、(『鎌倉遺文』 八三〇六「親鸞書状」正嘉二年(1258年) 親鸞→慶西御房)
- (21) 何ノ御詞カ可有ナレバ、只夢ノ様ニ思召シテ、ツヤツヤ息ヲモ出サセ給ハズ、(太平記二 - 大系 p260)
- (22) 木の葉をかきのけたれど、つやつや物も見えず (徒然草 54段 - 大系 p134)
- (23) Narichicaqið ua yume no cocochi xite tçuyatçuya mono uomoiuarenanda.
(成親卿わ夢の心地してつやつやものをもいわれなんだ。)(天草版平家物語 一 - p 24)
- (24) 忽ち后を失い参らせけん事もつやつやきこしめされず。(御伽草子 熊野本地 - 大系 p430)

室町時代末から江戸時代にかけては、「つやつや(と)」における否定表現との呼応関係が緩んでくるが(1. 3. / 1. 4. 参照)、やはり江戸時代においても文学作品で

は否定表現と呼応する形が「つやつや(と)」の用例の中でもっとも多く用いられている。その参考例は次のとおりである。

(25) むすめはこゝちわづらひて、つやつや湯水をだに聞いれず。(了意・伽婢子七(五)死亦契 - 新大系 p206)

(26) 宮内つやつや物もいはず倦(うみ)つかれた躰なれば。(秋成・諸道聴耳世間猿 五・祈祷はなでこむ天狗の羽帚 - p108)

(27) 御供(おんとも)つかまつるべしとて。信々(まめまめ)しく聞(きこ)ゆれど。松稚(まつわか)は。つやつやこれを諾(うけひ) 給はず。(馬琴・墨田川梅柳新書 四 - p206)

また否定の陳述副詞としての用法が、かなり固定化していたと思われる中世の「つやつや(と)」の用例の中にも否定辞を伴わないものがある。しかし、次の2例は「つやつや(と)」が、いずれも消滅を表す否定的な内容の動詞(絶ゆ、忘る)にかかり、否定表現にかかるものと同様に、意味としては全否定を表しているので、先にあげた否定辞を伴い陳述副詞化した「つやつや(と)」と近い用法として扱っても差し支えないと思われる。

(28) 將軍又カ、ル死シテ源氏平氏ノ氏ツヤツヤトタユベシヤハ。(愚管抄 七 - 大系 p342)

(29) 「げに つやつや忘て みてまいれ」とおほせあり。(とはずがたり 二 - p147)

ところが(30)の用例となると、動詞の否定的な内容と対応するとともに、擬態語として用いられている情態副詞の「つやつや(と)」が持つ、「もののない状態」「障害物がなく、開けた状態」の意味を表しているようにも見える。

(30) 林をつやつやと被切て候よし、承候しかハ、(『鎌倉遺文』五一九八「中原某書状」嘉禎三年(1237年))

前出(9)の『落窪物語』の用例のように、視覚動詞にかかる情態副詞ではあるが「額が禿げ入り毛の無い状況」と、(30)のように否定的な内容の動詞と呼応しているが「木をすっかり切ってしまうこと」は、意味的にかなり近似している。

また、平安時代の「つやつやと」が表していた「摩擦が少なく光沢を帯びた表面」とは、滑らかさや光沢を阻害する原因になるもの(凸凹など)がまったくないことを同時に表しており、この側面が中世において全否定を表す表現につながっていたものとも考えられる。(9)や(30)を「否定の陳述副詞」化の過程におけるバリエーションの一つとして把握しておきたい。

以上のように、中世の「つやつや(と)」は、ほぼ否定表現と呼応する副詞としても用いられており、平安和文の情態副詞の用法と機能面でまったく異なった用いられ方をしていたといえよう。

1. 3. 全否定から転じた、完全性を表す「つやつや(と)」(室町末～幕末)

1. 3. 1. 近世初頭の『日葡辞書』、近世末の『和英語林集成』における「つやつや(と)」の「全否定」「完全性」に関する記述

室町時代から江戸時代にかけても、基本的には否定表現と呼応する副詞として用いられているが、一方で「否定の陳述副詞」として固定された用法にとどまらず、そこから新たに肯定表現に用いられ、「完全性」を表すような用法が派生する。

肯定表現に用いられ「完全性」を表すような用法への変化は、室町時代後期のことが収められている1603年刊の『日葡辞書』⁷にもすでに現れている。

とはいえ、『日葡辞書』の「つやつや」の項においても、院政・鎌倉時代と同様に「摩擦が少なく反射するような状態」を表す擬態語としての説明はなく、文例では否定の形式と呼応する副詞の形が挙げられており、否定と呼応する用法が基本となっている。

Tçuyatçuya(マ)。ツヤツヤ (つやつや)

一般に趣を添えるのに用いられる副詞で、否定動詞〔否定形〕を伴い、〔または〕思いめぐらす事柄などについて用いられる。例、Tçuyatçuya fenjiuo mŏsazu. (つやつや返事を申さず) 全く返事をしないで。(『邦訳日葡』 - P638)

少なくとも例文を見る限りでは『日葡辞書』において、「つやつや」は否定表現にかかる副詞として定着しており、擬態語としての用法はほとんど意識されるものではなかったようである。⁸

一方で「思いめぐらす事柄などについて用いられる。」とあり、この部分について『邦訳日葡辞書』P638の編者の注では、

Tçuyatçuya という副詞は、否定形を伴って‘少しも’‘全く’を意味する場合と、思いめぐらす事柄などに用いて、‘つくづく’‘十分に’を意味する場合があることを述べたものと解される。つやつや：たしかにといふ心也 (匠材集, 二)

と解説している。

ちなみに「たしかに」の解説で参考例として引かれている『匠材集』は慶長2年(1597年)の跋文があり、参考にした本⁹では板本の刊行が寛永15年となっている。少なくとも寛永15年よりは以前、跋文を信用するなら『日葡辞書』とほぼ同年代のことば

を反映していたといえる。このことから『日葡辞書』『匠材集』の時代には、「つやつや(と)」が否定表現と呼応する副詞としてだけではなく、否定表現と呼応しない形か、もしくは否定表現と呼応していても「全否定」の「全」の部分に注意の向けられるような見方をされていたと考えられるだろう。

近世初頭の『日葡辞書』に対して、今度は近世末期、幕末～明治初年にかけての「つやつや(と)」についてヘボンによる『和英語林集成』¹⁰を見ていく。近世初頭と近世末期の辞書の記述から、近世において「つやつや(と)」がどのように認識されていたかを確認する。

『和英語林集成』は、幕末に出た〈初版〉から明治維新を経た〈再版〉、明治初期の〈3版〉まで、それぞれ時代の変化に応じた増補・改定が施されているが、「つやつや(と)」に関しては〈初版〉と〈再版〉で本文にほとんど改変がないので、〈初版〉と〈3版〉を以下に示す。

〈初版〉1867 (慶応3) 年刊

† TSZYA-TSZYA, ツヤツヤ, adv.

Well, satisfactorily. — *gugo wo meshi-tamawadz*,

(つやつや供御を召し給わず) did not eat his food with relish.

〈3版〉1886 (明治19) 年刊

† TSZYA-TSZYA, ツヤツヤ, adv.

Clearly, plainly; used with a negative verb, not at all, not very well:

— *gugo wo meshi-tamawadz* (つやつや供御を召し給わず),

did not eat his food.

(『和英語林集成 初・再・3版対照総索引』第二巻 - p609)

※(カッコ)内は筆者が付した。

〈初版〉と〈3版〉の記述を比較してみると、〈初版〉では「つやつや」の語義に Well, satisfactorily. (よく、十分に) があてられている。これは、『日葡辞書』の否定表現と呼応しない意味に対する訳語や、江戸時代の否定表現と呼応しない「つらつら」と意味・用法が重なる「つやつや(と)」の捉え方(次項1. 3. 2. 参照)とよく似ている。しかし、例文は否定辞の付いたものであり、少なくとも「つやつや」の用法においては否定表現と呼応する形が典型的な用例と判断されたのだろう。例文中、Well, satisfactorily に対応する部分は with relish (満足そうに: うまそうに: 楽しそうに) によって表されている。

〈3版〉では語義に Clearly, plainly というどちらも「はっきり」「明白に」という

完全性を表す語に変えられており、また、解説には used with negative verb (否定辞を伴う) の一文が加わり、否定辞を伴う意味として not at all, not very well が挙げられている。例文は<3版>もほぼ同じながら、訳文から with relish が削られており、一層否定の陳述副詞としての用法を強調するようになっている。

続いて「つやつや」の項目に用いられている†の記号についてであるが、これは古語である事を示す記号である。

<初版>の記号†の説明では ‘stand for word used only in books or obsolete’ (本の中で使われる：書きことば：文語か、古語の略) となっており、<再版>では記号及び説明なし、<3版>では単純に ‘stand for obsolete’ (古語の略) となっている。この注記から、少なくとも『和英語林集成』編集当時の幕末から明治の初期において、否定表現と呼応する「つやつや(と)」ということばが、一般には古語の意識で認識されていた可能性も考えられる。

以上のように、基本的には『和英語林集成』でも、否定辞と呼応する形式が一般的な文例とされていながら、全否定の「全て」を表す部分が注目されており、完全性を表す語として認識されていたようである。また、「光沢」を表す意味はない。この点でも『日葡辞書』の「ツヤツヤ」の項目・解説と共通している。

1. 3. 2. 江戸時代の用法における完全性を表す「つやつや(と)」と「つらつら」「すやすや」との関係

「つくづく」「十分に」の意味で『日本国語大辞典 第二版』(以下『日国二版』)の「つやつや」の項目に該当するのは「②物事をじっくり行なうさまを表す語。よくよく。つくづく。つらつら」「③すっかり寝入るさまを表す語。すやすや。とろとろ。」と思われる。②に関しては動作が十分念を入れて行なわれているさまを表しており、次の用例が挙げられている。

(31) 扱又紫式部がつくりたる源氏物語をとりひらき、つやつや是を見て、しばらくぼうぜんとおはします、(浄瑠璃源氏供養 四 - p24)

(32) つやつやおもふに、当世傾国の威儀すたれ、けしきをとろへ来るをいかにといふに、(色道大鏡 十五 - p477)

③の「つやつや(と)」は寝ている様子を表す情態副詞として使用されているというよりは、陳述副詞の用法から派生した完全さ(睡眠を修飾する場合は「完全」に眠っている様)を表していると理解すれば『日葡辞書』の「つくづく」「十分に」の意味に叶うと思われる。

(33) あるじをどろきしやうじをさつとあけければ。くびとびかへりどうにおさま
りつやつや。ねいりてあたりけり。(浄瑠璃 あふひのうへ - p76)

(34) 只今は乳母(オモ)がふところにつやつやとねむりおはします(綾足・本朝水
滸伝後篇四 廿七条 - p217)

以上のような解釈に基づけば、「つやつや(と)」が否定表現との呼応から全否定を表すことで、やがて否定を表す部分が欠落しても完全性や十分さを表す副詞に転じたとも受け止めることもできる。

しかし②に該当する(32)のような用例の場合、「つらつら」という情態副詞に用法・音ともに類似しており、語が混同して用いられた可能性も否定できない。『鎌倉遺文』や『徒然草』には(31)(32)とかなり類似した文脈で「つらつら」が使用されている。

(35) 一 同願云、宮寺の僧俗の官等、品秩を申さたむへき事云々、

右つらつら近來の風儀をみるに、さためて当代の 聖慮ニ

そむかんか、(『鎌倉遺文』八八二五「行清立願文案」弘長二年(1262年))

(36) 世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらつら思へば、誉を愛するは、人の聞をよろこぶなり。(徒然草 38段 - 大系 p120)

江戸時代の用法とは異なり、院政・鎌倉時代には「つやつや(と)」は否定の陳述副詞として固定化しているため、「つらつら」と同じような意味で使用されている例は一切見当たらないので、(35)のような「つらつら」は、院政・鎌倉時代において「つやつや(と)」とは別語として識別されていたと推測される。

しかし『日葡辞書』になると、「ツラツラ」は「ツヤツヤ」とは別に項目が立っているが、例文の訳が「ツヤツヤ」の意味の記述と重なる部分があり注目される。

Tçuratçura. ツラツラ (つらつら)

副詞。注意深く。¶ Tçuratçura anzuru. (つらつら案ずる) ある事を注意深く思いめぐらす。(『邦訳日葡』 - P635)

「ツヤツヤ」では意味・用法として「思いめぐらす事柄などについて用いられる」と記述されており、「ツラツラ」では「つらつら案ずる」の文例の訳が「ある事を注意深く思いめぐらす。」となっていて、「案ずる」を修飾する情態副詞となっている。このあたりから「ツヤツヤ」と「ツラツラ」の意味の重なりが観察できると言えよう。

また「つやつや(と)」と「つらつら(と)」との意味・用法の重なりは『日国二版』「つやつや(と)」の項目③の「すっかり寝入るさまを表す語。すやすや。とろとろ。」と「つらつら」の項目(二)の「よく寝入るさま。ぐっすり。」でも見出される。

(37) 男も草臥て。つらつら寝入れば。女ハねいりもせず。(了意・東海道名所

記三 - p226)

「つやつや(と)」と重なる用法で「つらつら(と)」以外には、「すっかり寝入るさま」で「すやすや」も使われている。

(38) 心すくやかになり給ふらん、すやすやとねぶり給ひけり。(一茶集・父の終焉日記 - 大系 p421)

ここで「つやつや」「つらつら」「すやすや」の使用場面を整理すると次のようになる。

「②物事をじっくり行なうさまを表す語。よくよく。つくづく。つらつら」

→「つやつや」「つらつら」

「③すっかり寝入るさまを表す語。すやすや。とろとろ。」

→「つやつや」「つらつら」「すやすや」

②③ともに各語が擬態語・音に共通部分のある疊語として認識された場合、厳密に区別をせずに用いたか、あるいは似た音であるために語を混同して用いたという見方も可能であるし、「つやつや(と)」という語の持つ全否定の完全性と「つらつら」の持つ動作の十分さが意味の上で接近したというように考えることもできるであろう。語の意味や用法の変化の要因は1つである必要はなく、「つやつや(と)」の場合、特に不安定な擬態語から派生した副詞という性質上、いくつもの諸条件が組み合わさることで、結果として以上に挙げたような変化が起こったと思われる。

1. 4. 再び擬態語としての「つやつや(と)」(江戸時代～)

江戸時代には「つやつや(と)」が、「摩擦が少なく光沢を帯びた表面」を表す擬態語として、観察されるようになる。

(39) 日々記の筆かはき兼たるぬれ色も、つやつやとしほらしく、(十八番発句合 - p354)

(40) 栗三つ拾ひ来りて、庭の小隅に埋め置たりしに、つやつやと芽を出して嬉しげなりけるを、(一茶集・おらが春 - 大系 p454)

建部綾足の作品では「つやつや」が「つやつやし」という形容詞として用いられている例がある。

(41) はづかしげにてさし出したる、いと白くつやつやしき脛(はぎ)の細やぎたるまで (綾足・折々草 春の部 - p139)

(42) 御かしらのいと黒くつやつやしきより、御爪並(つまなみ)のほそやぎたる、(綾足・本朝水滸伝後篇 八 三十六条 - p259)

ただし「つやつや(と)」の「否定の陳述副詞」、「全てを表す副詞」、「擬態語として用いられている副詞」これら全ての用法を合わせても、『近世文学総索引』によって検索したところ、井原西鶴で用例数 0 例¹¹、近松門左衛門でも否定表現と呼応しないもの(情態副詞・擬態語の用法)で 1 例¹²だった。また、松尾芭蕉も全集収録作品中¹³情態副詞として用いている(39)の 1 例のみである。黄表紙・浮世草子・洒落本など¹⁴でも今回通覧した限りでは「つやつや(と)」を見出すことができなかった。今回の調査において、単独の作者で「つやつや(と)」の複数使用が認められたのは、先にも挙げた上田秋成、建部綾足、滝沢馬琴など読本系の作家に偏る。

これはあくまでも推測だが、読本系の作家は古典の教養をもとに古語意識をもって、(特に否定辞を伴う形の)「つやつや(と)」を使用した可能性も考えられるのではなからうか。前項 1. 3. 1. の『和英語林集成』の記述についても指摘したが、江戸時代においてすでに否定辞と呼応する「つやつや(と)」は一般的な用法ではなくなっていた可能性が考えられる。「つやつや(と)」の意味が拡大する中で「否定の陳述副詞」としての用法が徐々に廃れていったことも考えられるが、逆に否定辞と呼応する機能が弱くなってきた代わりに再び擬態語として用いられやすい状況になったことも考えられる。

以上、江戸時代において、否定表現と呼応する形以外では、全てを表す程度副詞的な使用法や擬態語としての用法が認識され、文脈上使用される場面が他の語と重複する場合など「つやつや(と)」という語の境界が曖昧になっている例が散見された。

1. 5. 「つやつや(と)」まとめ

ここまで、平安時代から江戸時代・幕末まで「つやつや(と)」の語史を「否定の陳述副詞」化という視点から通覧してきた。ここで、もう一度全体の流れを確認したい。

平安時代は「摩擦が少なく反射するような状態」を表す情態副詞として使用されていた「つやつや(と)」が、院政・鎌倉時代には必ず否定表現と呼応するようになり、用法の固定化がすすむ。いわゆる「否定の陳述副詞」化ともいえよう。

室町時代・江戸時代も引き続き「否定の陳述副詞」としての用法が続くが、一方で否定表現と呼応しないで「全て」「まったく」を表す用法や、「つらつら」「すやすや」など他の擬態語と混同して用いられたとも思われるような用法、平安時代のような情態副詞・擬態語としての用法も登場する。近世において、「否定の陳述副詞」から用法が広がるとともに、「否定の陳述副詞」としての用法が徐々に廃れていった。おおよそ次に示すような流れで変化したといえるだろう。

(平安)	(院政・鎌倉)	(室町・江戸)	(幕末以降)
情態 副詞	→ 否定の陳述副詞	→ 否定の陳述副詞 (全否定)	→ 情態 副詞
		→ 肯定に用いられる副詞	
		→ 情態副詞	

おわりに

中世の一時期に「否定の陳述副詞」化しながら、現在「否定の陳述副詞」としてはまったく使用されていない「つやつや(と)」の語史を辿ってきた。その結果、否定表現と呼応する形は必ずしも絶対のものではなく、情態副詞であったものがある時期に否定表現と呼応する形が固定化することで「否定の陳述副詞」と呼びうる用法になることが観察された。

また、この「つやつや(と)」において「否定の陳述副詞」化(固定化)することは、寿岳(1983)の述べるような「ある種の擬声語は、状態性のものから、程度性を示したり陳述支配をしたりするようになるが、その進展に反比例してその本来の性格を急速に喪失してゆく」という一方向的な変化ではない。「否定の陳述副詞」化で語の持つ機能が文法的に変化したとしても、前に持っていた語の「意味」そのものが消失するわけではなく、場合によっては再び擬態語として前々代で用いられていた用法と似たような用法で使われるようになることがわかった。

「つやつや(と)」は、擬態語が出自ゆえに情態副詞的用法と陳述副詞的用法の間で揺らぎながら変化する部分と、「否定の陳述副詞」として、否定表現との呼応関係が変化する部分とが、変化の様相をより複雑にしている。

「つやつや(と)」の一語のみで、全ての「否定の陳述副詞」の歴史的変遷のパターンを解明できたわけではない。しかし、副詞の意味的な変化や文法的な変化が一定のパターンや一方向的な変化によって起きているわけではないことの一端を垣間見ることができたと思う。

現在陳述副詞とされているものについても、その扱いはいまだ定まっていない観¹⁵がある。日本語を母語としない日本語学習者をもっとも習得困難なのも陳述副詞といわれ¹⁶ている。おそらく陳述副詞とは何であるかを理論のみから導き出すことはできないであろう。今後とも陳述副詞といわれる副詞の語史をたどり、変化の姿を整理することが陳述副詞といわれる一群の副詞を理解するために必要と思われる。今後の課題としたい。

- 1 寿岳章子(1983)『室町時代語の表現』(擬声語の変化) p192 部分

衿一キツトソ。威勢ガアルソ。(蒙求抄)

持満之術トハ弓ヲ引テキツト保ツ心也(江湖風月集抄)

に於けるキツとは、キツ+とであり、まがいもない擬声語であり、後述の現代語のある種のキツとは大変違う。

右の御さん用はかさねできつといたさるでござらうず(虎明本狂言 ちどり)

何がさてきつと御さん用申さいでは(虎明本狂言 八句れんが)

中世末に於ける一般的なキツとを念頭におけば、この二例のキツとはやはり純粋に擬声語的なものとして理解すべきであるが、それにしても現代語的な方向をとりつつある趨勢は既に見られよう。

- 2 寿岳章子(1983)『室町時代語の表現』p196 15

3 助詞「と」を擬態語「つやつやと」の「と」の付く形は擬態語として用いられている時に多く現れ(平安時代の「つやつやと」の項参照)、「つやつや」は否定形式と呼応する時にやや多く現れる傾向がある。しかしこの論考で1語にまとめた理由は、擬態語として用いられる「つやつや」が全くないわけではないということ、否定形式と呼応する「つやつやと」が少数とはいえない(中世の否定と呼応する「つやつやと」は『水鏡』で2例、『愚管抄』で15例、『古今著聞集』で1例ある)こと、用例を見る限り「つやつや」「つやつやと」が文脈上同じ意味で用いられていることによる。

- 4 小松英雄(2001)『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』(1日本語語彙の構成・1.02活写語) p37

5 平安和文については注6の引用文献を参照。また、訓点資料については築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』同(1969)『平安時代語新論』(共に東京大学出版会)、『時代別 国語大辞典』の「上代編」を参考にした。

6 宮島達夫編(1975)『古典対照語い表』(笠間書院)によると、「蜻蛉日記」「枕草子」「源氏物語」「紫式部日記」以外の調査対象の和文(「万葉集」「竹取物語」「伊勢物語」「古今和歌集」「土佐日記」「後撰和歌集」「更級日記」「大鏡」「方丈記」)には「つやつやと」が用いられていない。また、『古典対照語い表』において、「徒然草」の用例は、「つやつやと」とは別に、「つやつや」[「すこしも」の意]として別に項目が立てられている。

なお、本文中用例として引用した次の作品は、岩波書店刊「日本古典文学大系」を使用した。(以下、収録作品を大系本とし、大系本からの引用の場合はページ数の前に「大系」と断っている。)

「かげろふ日記」「落窪物語」「枕草子」「紫式部日記」「夜の寝覚」「狭衣物語」「栄花物語」「愚管抄」「宇治拾遺物語」「徒然草」「平家物語」「古今著聞集」「太平記」「御伽草子」「おらが春」「父の終焉日記」

ただし、この論文では大系本で使用されている漢字の旧字体を新字体に改め、踊り字は通常の記述に改めた。

大系本以外の引用資料については次のとおりである。

池田亀鑑編(1953)『源氏物語大成一』(中央公論社)

- 高山寺典籍文書総合調査団(1975)『高山寺古文書』(東京大学出版会)
- 竹内理三編『平安遺文(古文書編)』(東京堂出版)
- 竹内理三編『鎌倉遺文(古文書編)』(東京堂出版)
- 榊原邦彦編(1990)『水鏡 本文及び総索引』(笠間索引叢書 94 笠間書院)
- 玉井幸助(1958)『弁内侍日記新注』(大修館書店)
- 辻村敏樹編(1992)『とはずがたり総索引 本文編』(笠間索引叢書 98 笠間書院)
- 深井一郎編(1980)『慶長十年古活字本 沙石集総索引 索引篇・本文篇』(勉誠社)
- 泉基博編(1982)『十訓抄 本文と索引』(笠間索引叢書 78 笠間書院)
- 江口正弘(1986)『天草版平家物語 対照本文及び総索引 本文篇・索引篇』(明治書院)
- 古浄瑠璃正本集刊行会編(1991)『古浄瑠璃正本集加賀掾編』第三(大学堂書店)
- 藤井乙男編(1925)『近松全集』第一卷(朝日新聞社)
- 松田修・渡辺守邦・花田富士夫校注(2001)『伽婢子』(新日本古典文学大系 75 岩波書店)
- 朝倉治彦校注(1979)『東海道名所記』(東洋文庫 平凡社)
- 野間光辰編(1961)『完本色道大鏡』(友山文庫)
- 井本農一・宮本三郎・今栄蔵・大内初夫校注(1966)『校本 芭蕉全集』第七卷(角川書店)
- 建部綾足著作刊行会(1986)『建部綾足全集』第四卷 物語(国書刊行会)
- 建部綾足著作刊行会(1987)『建部綾足全集』第六卷 文集(国書刊行会)
- 上田秋成全集編集委員会・代表中村幸彦(1990)『上田秋成全集』第七卷(中央公論社)
- 徳田武編(1996)『馬琴中篇読本集成』第五卷(汲古書院)
- 7 ここで言う『日葡辞書』には土井忠生ほか編訳(1980)『邦訳日葡辞書』(岩波書店)を使用した。(以下『邦訳日葡』)
- 8 中世における「摩擦が少なく反射するような状態」を表す語は、例えば『日葡辞書』には「ツヤ(艶)」の語がある。
- † Tçuya. ツヤ(艶)
- 例、Tçuyaga yoi,l,varui。(艶が良い、または、悪い)絹織物、あるいは、その他の織物が立派に、あるいは、悪く織られている。(邦訳日葡 - p638)
- この例では「ツヤ(艶)」が絹・その他の布の状態を表す語として解説されている。
- 9 正宗敦夫編(1936)『無言抄 匠材集』(日本古典全集 日本古典全集刊行会)跋文には「慶長二年三月上旬 法眼 紹巴」「寛永拾五年孟夏吉辰刊行」とある。
- 10 飛田良文・李漢燮編(2000)『ヘボン著和英語林集成 初版・再版・三版対照索引』全3巻(港の人)
- 11 近世文学総索引編纂委員会編(1990)『近世文学総索引 井原西鶴』別巻(教育社)
- 12 近世文学総索引編纂委員会編(1986)『近世文学総索引 近松門左衛門』別巻(教育社)に拠る。用例は次のとおりである。
- とかく女子(をなご)は髪かたち千筋と撫づる櫛(くし)の齒に。身持行儀(ぎやうぎ)の解きほだき子を思ふ手に艶々(つやつや)と。見かはす程に見えければ。(1320)
- ちなみにこの近松の用例は江戸時代の擬態語としての「つやつや(と)」としては比較的古い方だろう。
- 13 島井清・久富哲雄編(1969)『校本 芭蕉全集』第十卷 俳書解題・総合索引(角川書店)に拠る。
- 14 参照したのは、岩波書店刊「日本古典文学大系」より、以下に所収の作品。
『仮名草子集』『黄表紙 洒落本集』『浮世草子集』『江戸笑話集』『東海道中膝栗毛』

『浮世風呂』『春色梅児誉美』

¹⁵ 陳述論および陳述副詞に関する文法史的な展開については、尾上(2001)の「第二部 陳述論、それに関係する学史」に詳しい。また、否定と呼応する陳述副詞については、近藤(2000)の「5. 3 現代語の否定と呼応する副詞」も参考になる。

¹⁶ ①渡辺(2001)では、日本語を母語話者としなない日本語学習者の陳述副詞の習得について、「日本人とアメリカ人とを両親とする女性日本学者で、アメリカ人と結婚して男の子をもうけている方」の話として、「息子が「せっかく」という言葉を使ったのです。私は、ああ息子も日本語がわかって来たのだわ、ととても嬉しく思いました。」という話を紹介している。また、同書では人称代名詞・敬語とならんで「一部の副用語、学校文法で一般に通用している言葉でいえば一部の副詞」も「主体的意義に冷淡な言語」(英語・フランス語・中国語など)を母語とする人にはうまく理解できないとしている。

②少し古いところでは、水谷(1961)でも「副詞のもつ主観的な機能は外国人には非常に理解しにくい。単語を与えて文章を作らせると、最も間違いの多いのは副詞である。」という指摘がある。

参考文献・引用文献

尾上圭介(2001)『文法と意味 I』(くろしお出版)

近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)

寿岳章子(1983)『室町時代語の表現』(桜楓社)

築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会)

同上(1969)『平安時代語新論』(東京大学出版会)

土井忠生ほか編訳(1980)『邦訳日葡辞書』(岩波書店)

飛田良文・李漢燮編(2000)『ヘボン著和英語林集成 初版・再版・三版対照索引』全三巻(港の人)

正宗敦夫編(1936)『無言抄 匠材集』(日本古典全集 日本古典全集刊行会)

水谷修(1961)「日本語のむずかしさ—日本語を外国語として学習する外国人の書いた文章に表れた誤りの分析—」(国学院大学国語研究会『国語研究』第12号)

宮島達夫編(1975)『古典対照語い表』(笠間索引叢書4 笠間書院)

渡辺実(2001)『さすが!日本語』(ちくま新書 筑摩書房)

『日本国語大辞典 第二版』(小学館)

『時代別 国語大辞典』「上代編」全1巻、「室町時代編」全5巻(三省堂)

(たわ まきこ・東京都立大学大学院生)